

『くまもとあか牛』ブランド力強化プロジェクトを推進する「熊本県産牛肉消費拡大推進協議会」開催の「くまもとあか牛ブランド研修会」に参加



キリングroupは、『復興応援 キリン絆プロジェクト』熊本支援の一環として、『くまもとあか牛』ブランド力強化プロジェクトを推進する「熊本県産牛肉消費拡大推進協議会」が開催する「くまもとあか牛ブランド研修会」に参加しました。

2017年8月22日（22日・セミナー：熊本県畜産会館4階・会議室、23日・現地視察：跡ヶ瀬牧野、斉藤牧場、岩根牧場）

食産業復興支援

キリングroupは、熊本県、日本財団の3者で包括支援協定を締結した『復興応援 キリン絆プロジェクト』熊本支援の一環として、熊本の食産業の復興支援に取り組んでいる。

その一環として、『くまもとあか牛』ブランド力強化プロジェクトを推進する「熊本県産牛肉消費拡大推進協議会」が開催する「くまもとあか牛ブランド研修会」に参加。

22日のセミナーでは、地域ブランドや地域の観光や特産品のマーケティングが専門の静岡県立大学経営情報学部・岩崎邦彦教授を講師に迎え、県内のあか牛生産者などを対象に、あか牛のブランド力強化のためのアドバイスや他県での取り組み事例などが紹介された。

翌23日は岩崎教授らと、あか牛の放牧地や牧場などの生産現場を視察。最初に訪れた阿蘇市の跡ヶ瀬牧野では、広大な阿蘇の草原でのびのびと育つあか牛を前に、牧野の管理や放牧のメリットなどについて、同牧野組合長の江入敏雄様の説明を受けた。

その後、菊池市に移動し、あか牛の肥育農場である斉藤牧場と、繁殖から肥育、出荷までの一貫経営を行っている岩根牧場を視察。熊本県内でもトップクラスの肉量や肉質を誇る両牧場では、飼料や飼育方法に関するこだわりのほか、経営上の工夫などが、両牧場の代表者から説明された。視察を終えた岩崎教授は、「あか牛は熊本を代表するブランドになる可能性を十分に秘めている」と、今後の認知度アップや消費拡大に期待を寄せた。

コメント①

静岡県立大学経営情報学部 教授 岩崎 邦彦 様

「食」は人を幸せにするジャンルだと思います。また、今は「(他との) 違い」や「個性」が「価値」につながる時代です。あか牛の赤(褐毛)は、一般的な和牛の黒毛との違いがはっきりしているので、新たな提案もしやすいと思います。また、今回の現地視察のように、実際にあか牛が放牧されている阿蘇の草原を訪れるなど、体験を通して消費者に愛着を生むことも有効ではないでしょうか。さらに、現在の健康志向も良質のたんぱく質を多く含み、脂肪分が控えめのあか牛肉への追い風になっています。そのためにも、今後はそうした価値を生かしたブランド化と、あか牛を通じた熊本のイメージアップにも期待しています。



コメント②

跡ヶ瀬牧野組合 組合長 江入 敏雄 様

面積 258ha の跡ヶ瀬牧野では、現在、3～15歳の妊娠の雌牛を中心に約120頭を放牧しています。うち約80頭は「熊本型放牧」と呼ばれる預託放牧で、阿蘇以外の平坦地の肉用牛を受け入れています。また、通常は牧野から畜舎に移す冬場も放牧のまま越冬させる「周年放牧」を行うなど、飼養管理の労力軽減や冬季用飼料の収穫作業の軽減に取り組んでいます。放牧はあか牛の足腰を強くし寿命も延びるだけでなく、阿蘇の貴重な草原の維持にも繋がるので、これからも続けていかなければと思います。



コメント③

斉藤牧場 斉藤 栄喜 様 (写真左から2人目)

当牧場は私をはじめ、妻、息子夫婦の4人で家族経営を行っています。また、平成28年7月からは息子を社長に法人[(株)SAITOH FARM]を立ち上げ、経営力強化にも取り組んでいます。以前からあか牛に愛着があり、JA 菊池の褐毛和種研究会で他のメンバーと切磋琢磨しながら、飼料の自給や出荷月齢を遅くするなど、肥育技術を高めてきました。これからもさまざまな方々の力をお借りしながら、あか牛肉のおいしさを多くの方に知っていただき、ファン拡大に力を尽くしていきたいと思います。



コメント④

岩根牧場 岩根 正俊 様 (写真中央)

当牧場では、12年前から肥育する牛をあか牛一本に絞っています。また近年、畜産農家の高齢化も進んでいることから、肥育だけでなく繁殖や出荷まで全て自前で完結させる必要があると考え、一貫経営にこだわってきました。また、一つの牛舎で飼う頭数をできるだけ少なくしたり、牛舎のすぐ近くに牧草地を整備するなどして、あか牛がストレスなく育つ環境づくりにも力を注いでいます。その結果、通常よりも早い月齢24カ月で出荷できるだけでなく、出荷する枝肉の質・量も高い評価をいただいています。

